世界の幸せをカタチにする。
Creating Peace & Happiness for the World
Musashino University
武蔵野大学 学術機関リポジトリ
Musashino University Academic Institutional Repository

〔博士論文紹介〕中国語を母語とする日本語学習者による終助詞「ね」「よ」「よね」のイントネーション産出

メタデータ	言語: ja 出版者: 武蔵野大学グローバルスタディーズ研究所 公開日: 2024-03-21 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 鄭, 穎 メールアドレス: 所属:
URL	https://mu.repo.nii.ac.jp/records/2000191

〔博士論文紹介〕

中国語を母語とする日本語学習者による終助詞「ね」「よ」「よね」のイントネーション産出

鄭 穎

学位取得年月　：令和 5（2023）年 3 月
取得学位名　　：博士（文学）
学位授与機関名：武蔵野大学

キーワード：終助詞、終助詞の機能、パラ言語情報、発話意図、イントネーション産出

要旨

音声コミュニケーションでは言語情報以外に、文字にできない発話意図や心的態度のようなパラ言語情報が伝達される。パラ言語情報の伝達にはアクセントやイントネーションといった音声的特徴、日本語特有のモダリティ表現である終助詞が深くかかわっている。終助詞は日本語のコミュニケーションに多く使用される助詞であり、特に「ね」「よ」「よね」は使用頻度が高い。終助詞のイントネーションは話し手の発話意図や心的態度、すなわち機能によって異なる。したがって、音声コミュニケーションにおいては終助詞の各機能と適切なイントネーションとの結びつきを理解し、適切に産出することが必要である。しかし、日本語学習者、特に外国語環境で学ぶ学習者にとってその習得は難しい。

これまでの終助詞の習得研究では、学習者の使用傾向や誤用、文法知識、コミュニケーション機能の理解などに焦点があてられ、終助詞のイントネーション産出は検討されていない。そこで、本研究は外国語環境で学ぶ中国語を母語とする日本語学習者を対象とし、終助詞「ね」「よ」「よね」のイントネーション産出を検討した。終助詞の機能という観点から発話意図の伝達能力を検討することを目的として、後述する 3 つの研究を行った。

調査協力者は中国の大学で日本語を専攻する学習者 44 名（1 年生 9 名、2 年生 22 名、3 年生 13 名；男性 8 名、女性 36 名）、および日本語母語話者 10 名で、「ね」「よ」「よね」を含む 27 の会話文（終助詞 3 つ×機能 3 つ×会話場面 3 つ）の音読データを収集した。学習者の音声データは聴覚印象評価と音声分析ソフトで出力したピッチ曲線を用いて分析した。母語話者の音声データはピッチ曲線を出力し、学習者データの比較対象として使用した。

【研究 1】では、「ね」「よ」「よね」の各機能によってイントネーション産出能力が異なるか、【研究 2】では、音声の学習リソースの使用と発音やイントネーションへの注意度によって産

出能力が異なるか、【研究 3】では、学習者が産出したイントネーションにどのような音声的な特徴が見られるかを検討した。各研究で以下のことが明らかになった。

【研究 1】では、聴解印象評価の分析から、どの終助詞も学年が上がるにつれてイントネーションによる発話意図の伝達能力が向上すること、各終助詞は機能によって産出能力の発達パターンが異なること、「ね」「よ」「よね」のうち、「ね」のイントネーション産出が特に難しいことが明らかになった。

【研究 2】では、音声の学習リソースの使用、および発音やイントネーションに対する注意度と聴覚印象評価との関係を分析した。その結果、授業外で利用する学習リソースからの音声インプットが適切なイントネーションの産出と関係していることが明らかになった。一方、発音習得には発音に対する意識化が重要であるが、自身の発音に意識するだけでは適切なイントネーションの産出には結びつかないことが示され、明示的な教育的介入の必要性が示唆された。

【研究 3】では、学習者が産出したイントネーションパターンの音声的特徴を母語話者の産出と比較しながら分析した。その結果、発話意図の伝達が明確かどうかは、イントネーションパターン、終助詞部分および文全体のピッチ変化の程度、終助詞と前接する語のアクセントなどの適切性がかかわっていることが明らかになった。

以上の 3 つの研究によって、終助詞による発話意図の伝達能力の発達パターンが終助詞の機能によって異なること、発話意図の伝達能力が、授業外での音声リソースの利用と関連があること、学習者の終助詞イントネーションには、音声的な適切性に問題があることを明らかにした。

これらの結果から、産出難易度の高い機能を中心にイントネーションパターンを明示的に提示する音声指導や、授業外の学習リソースの自律的、積極的な使用を促進する指導が必要であることが示唆された。したがって、教室内での音声指導と授業外の自律学習の連携方法を考えることが今後の重要な教育的課題となるだろう。

武蔵野大学大学院言語文化研究科言語文化専攻博士課程　修了生